

「恐怖時代の一挿話」さふわ（バルザック）

ルイ十六世がギロチン臺の露と消えた翌日、パリの夜の町を老婦人が早足で歩いてゐた。全土を震撼させた恐怖故に人影は少く、通りはがらんとしてゐた。只、誰かがつけてゐる氣配があつて、老婦人は怯えつつ足を早め、一軒のパン屋に飛込むと、金貨を出してパンを求めた。その身形から、嘗ては身分もあつたが今は貧しい彼女がなけなしの金を差出したに違ひないとパン屋の主人は同情して、見知らぬ男につけられてゐると訴へる彼女に、追拂つてやると云つて外に出て行くが、眞つ青になつて戻つて来て、「俺たちをギロチンにかけようつてえのか、この惨めな貴族め」と怒鳴りつけた。老婦人は店を飛び出し歩き出すが、やはり男がつけて来る。やがてパリで一番さびれた場所にやつて来た。男が荒廢の有様に驚いて佇んでゐる隙に、老婦人は一軒のあばら家に素早く姿を消した。

老婦人は三箇月前に革命政府に彈壓されたカルメル派修道院の修道女で、老神父ともう一人の修道女と三人であばら家に潜んでゐた。神父は氣骨ある男で、革命政府への宣誓を拒否した

お尋ね者だつた。聖體のパンを買ひ求めて來た老婦人が、ここはもう安全ではないと告げてゐると、階段に足音がする。女達は慌てて神父を衣裝棚に隠した。見知らぬ男が入つて來て、粗末な部屋を憐れむ様に眺めてかう云つた。自分は敵ではない、神父を匿つてゐるのも知つてゐる、秘密を漏す氣があれば疾うにやつてゐる。それを聞いて神父が姿を現すと、男は云つた。「ある高貴な方」の「御魂を鎮めるために、死者のミサを執行して頂きたい」。神父は思はずぎくりとするが、今夜十二時においでなさい、と答へた。亡き王の爲のミサである事を三人は察知した。

「死者のミサ」の時、四人のキリスト教徒は純粹な「献身」と「忠誠のおどろくべき」態度を示して祈つた。殊に見知らぬ男は大粒の涙を流し、「良心の呵責」を顔面に現しながら「限らない悔恨」の祈りを捧げた。

一年半後、ロベスピエールが失脚し、自由になつた神父が外出すると、大群衆が集つてゐる。ロベスピエールを處刑すべく囚人護送馬車と死刑執行人が通るのだ。馬車の中に男が突立つてゐる。例の見知らぬ男だ。あれは誰かと尋ねると、「死刑執行人」だと云ふ。神父は失神し、我に返るとかう呟いた。「フランスのどこにも勇氣が見あたらぬ」時、ギロチンの「鋼鐵の刃

だけにそれがあつた」。

當時フランスでは死刑執行人は世襲制で、「見知らぬ男」は王を處刑し、その息子も王妃マリー・アントワネットの首を刎ねた。バルザックは息子に會つた事があり、息子から得られた材料等に基いてこの迫力ある作品を物したといふが、就中「死者のミサ」の場面は感動的である。許されぬミサを四人は敢へて行ひ、特に「見知らぬ男」は職務とは云へ王殺害の「良心の呵責」からの救済を非常な危険を冒して迄も求めざるを得なかつた。前回、私はアナトール・フランスの、人間は「苦惱によつて高められ」てこそ全うたり得るといふ言葉を引いた。「鋼鐵の刃」の示した勇氣は「苦惱によつて高められ」た人間ならではないものである。「眞實の事柄」は大抵「ひどく退屈にできてゐる」から、その中から「詩になりうるやうなものを選び出すのが作家の腕前の半ば」だとバルザックは云つた。「恐怖時代」の眞實は退屈どころの騒ぎではないが、さういふ退屈ならざる時代が人間を偉大たらしめ、「詩」の感動を生み出すといふ事は慥かにある。逆に泰平の世が人間を卑小凡庸俗惡たらしめ、「詩になりうるやうなもの」を扼殺して了ふといふ事も。

（水野亨譯、「知られざる傑作他五篇」、岩波文庫）